

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

摩天楼が艦これ入り

## 【作者名】

rahotu

## 【あらすじ】

鋼鉄の咆哮のアノ船が艦これ入りでしっちゃんかめっちゃんかやりたい放題に暴れまわる。マツハで溶ける資材に艦隊、青くなる提督と妖精達。そしてついにあのラスボスまでがこっぴ漏らす「一体いつから羅針盤が効いていると思った」「なん、だと」「果たして艦これ世界の明日はどっちだ

## 第1話

ふと目覚めると私は海の上に立っていた。

おかしい、何故私は目覚めるといふ人間の知覚を持っているのだ？  
何故私は生身でしかも海自に二本の足で立っているのだ？何故私はあの鋼鉄の身体を失っているのだ？何故私はこの様な思考が出来るのだ？そして…

「此処はいつたい何処なのだ？」

それが彼女がこの世界で発した初めての言葉である。

とにかく周囲の索敵と移動を開始せねば、と彼女は思った。彼女が元いた世界では比類なき力を振るう超常の兵器達のらなかでも最強と謳われ、事実彼女一人で一個艦隊を消滅させている。

だが、自我というものに初めて目覚め肉体という脆弱な檻に囚われている彼女は初めての世界で何もかもが初体験のなか、不安と孤独を  
持て余していた。

「……」

彼女のレーダーに反応があった、数は6内二隻は重巡、三隻の駆逐艦に一隻の戦艦で構成されている。

彼女の反応は素早かった、自身の艦装(これは元いた世界にはなく、この世界で得た初めてのものだったが、手足を動かすが如く自然に展

開していた)兵装機関共に異常なし。衛生とのリンクが無い以外無線索敵異常なし。

戦闘行動を行うための全ては、彼女に自然に備わっていることだ。

IFFにも反応なし、全周囲無線での呼びかけにも応じないどころか単縦陣を組み、戦闘速度でこちらに向かって来る。

彼女の口は自然と持ち上がり、目はまるで欲しいオモチャを貰った子供の様に輝く。

躊躇う必要は無い、それはこの世界に来る以前から彼女がもつたつたひとつの意識。

純粋な敵意と溢れんばかりの闘争本能と破壊衝動である。

彼女の艦装についている兵装が全て仰角を上げ、その砲口を天に向ける。

それは見るものがいればこう思っただろう、海上に立つ摩天楼と。

「ヴォルケンクラッター、これより殲滅を開始する」

瞬間、80cmの主砲が火を噴き轟音が大气に木霊する、敵は水平線の遙か彼方の向こう側。

だが不敵に歪められた彼女の微笑は確かな手応えを感じた。

レーダー上では既に2つの反応が消えていた。初弾から二発も命中。反応から重巡に駆逐艦を仕留めた事が分かった。

続いて主砲斉射3連、彼女が撃ち終わった後海上は又元の静寂を取り戻していた。僅か斉射四回、それだけで戦艦と重巡を有する艦隊を一方的に薙り全滅させた。

そこに彼女を熱くさせる血の闘争はなく、唯々無感動な勝利だけであつた。

この世界で深海棲艦と呼ばれる存在とのファーストコンタクトは散文的な結果に終わった。

深海棲艦の全滅と彼女の勝利として。

## 第2話

一方的に深海悽艦を葬ったヴォルケンクラッツァーであるが、勝利したにしては彼女の顔はういていない。

それもそのはず…彼女は今、

「お腹…減った」

ゴツイ艦装に対して華奢な細い手をお腹に当て、彼女は初めて感じる空腹を覚えていた。

本来兵器であれば空腹等覚えなかったらだろうが、肉体を得た今彼女を耐え難い飢えが襲っている。

そう某ボーキサイトの女王やヤマトホテル等比べ物にならない程、彼女は物凄く燃費が悪いのだ。

「とにかく何か食べ物を探さなくちゃ」

彼女は空きつ腹を抱えながらとりあえず移動を開始した。

幸運な事に彼女のいた場所から近くに深海悽艦の大規模補給艦隊があり、しかも深海悽艦達は正面から来る艦娘を相手にしていた為ヴォルケンクラッツァーには気付いていなかった。

護衛の艦隊は先程彼女が海に沈めたため、補給艦隊には全く無防備である。

こうして、人間が北方海域と呼ぶ場所に規格外の存在が敵の背後か

ら殴り込みをかけてきたのだ。

「カエレ、カエレ」

北方海域の門番深海棲艦の中でも特に際立った鬼姫の中で、北方棲姫と呼ばれる幼女が海域に暴力の嵐をふるっている。

白い肌に白い髪、大きなまん丸お目めに白いワンピースがよく似合う幼女が幼女があばれまわり、拳の一振りで見舞う海が泡立ち地団駄を踏めば波がたつた。

なんとも言うが幼女である、黒の紐パンを履いた紛れもなく幼女である。

彼女の周りには5基の護衛要塞が主を守る様に浮かび、艦娘達の攻撃を受け止めている為所々傷が目立つ。

「監視してや」

その実際平坦な独特な形状が有名な軽空母龍驤が巻物を展開し、式神式艦載機を飛ばす。

紙で出来た飛行機、しかし龍驤の指示によって天高く舞い上がり、本物の艦載機となって極寒の空に編隊を組む。

その正面には黒い球体が何百と浮かび、敵意を剥き出しに襲いかかってきた。

互いに編隊が崩れ、空の各地で巴を描き次から次へと火を噴き墮ちてゆく。

北方悽姫の艦載機と龍驤は熾烈な制空権争いを行いながら、その隙に他の艦娘が北方悽姫に迫る。

「全砲門、ファイアー」

巫女服の上衣にスカートという出で立ちの高速戦艦金剛は41cm砲を北方悽姫の至近距離で火を噴く。

堪らず後退する北方悽姫、金剛の砲弾は飛行場型深海悽艦に有効な三式弾。

如何に強大な力を持つ姫であろうと本調子でない今戦艦の主砲は重く響く。

先のAL作戦でその存在が確認された北方悽姫は、受けた傷を癒すため北方海域の奥地に潜んでいたが、人間に察知され完全に回復仕切れていない状態での戦闘を余儀なくされた。

個体として好戦的でない北方悽姫だが、鬼姫はいるだけで深海悽艦を引きつけ資材を食い荒らす。

放っておけば何れ飽和を迎え、溢れ出すのは目に見えている。

故に最悪を回避すべく人間は討伐艦隊を送り込んで来たのだ。

北方悽姫としては唯居心地がいい場所に住んでいるだけで、自分から何かする事は無いが彼女は存在そのものが人間にとって悪なのだ。

そこに北方悽姫も深海悽艦も艦娘も、人間の提督の都合は無い。

唯一方的なエゴイズムのおしつけであり、それ故人間と深海悽艦との間に相互理解と言う発想さえない。

側から見れば幼女を相手に全力でぶっ放す少女と言う大変シユールな絵ズラの理由はここにある。

だが現実にはシユールを超えた速度で展開していくものだ。

突如としてこの世のモノとは思えない金切声が響く、艦娘達は何だと思議がり北方悽姫は白い顔が青く染まる。

それは輸送ワ級が上げた断末魔であった。

北方悽姫は目の前の艦娘を放り出し、全力で海域の奥地にむかい、突然の行動に慌てて艦娘達は北方悽姫を追撃する。

そして海域の最深部で彼女達は出会った。

バリムシャムシャゴキユ、バリバリムシャムシャモグモグ

それは出来の悪いホラーが現実に浮かび上がったような光景だった。

巨大で禍々しい艦装に対し、酷く不釣り合い細い長い手足をした艦娘がいた。



喪服と水面まで垂れる黒い髪に赤い目という今時ホラー映画でもお目にかかれない女がいた。

細く小枝の様に簡単に折れてしまいそうな手で、ワ級を掴み妊婦の様に膨れ上がった下腹部にせの艦娘は牙を突き立て中身をすすり出す。

口元から溢れるドロっとした黒い液体と時々覗く赤黒い物体。

彼女の足元には既に空となったワ級だったものが無数につかんでいる。

最後の一雫を飲み干し、幽霊の様な女は北方懐姫や艦娘達を無視し海域を去っていった。

### 第3話

「雑魚が 死に腐れ」

巨大な艦装を縦横無尽に操り80cm砲が直撃した戦艦夕級が轟沈し、単縦陣で突っ込んできた重巡り級雷巡子級はまとめてレールガンで貫かれ胴に穴が空いたまま海をただよう。

艦載機はパルスレーザーとVLSに追い回され、纏まれば光子榴弾で跡形もなく吹き飛ばされる。

「どつした？こんな物がこの世界の船は、まだアイツらの方がマシだったぞ」

ヴォルケンクラッツァーの周りには既に1000を超える深海棲艦の残骸が漂い、その5倍のかずに包囲されている中彼女は嗤う。

まるでゲームにすらなっていない、兵器も性能もあの世界に比べたら子供のオモチャ同然、その癖数を頼みに突っ込んでくる低脳ぶり。

深海棲艦、この雑魚共はそういつらしいが今まであったどの船も自分にかすり傷一つ負わせていない、いや負けさせられない私が強すぎるからだ。

ヴォルケンクラッツァーの装甲は自身の主砲の直撃を受けても耐えられる装甲であり、しかも重力場防壁が装甲に届く前に砲弾を止めてしまう。

正に鉄壁不沈要塞と化したヴォルケンクラッツァーの防御を打ち

破るには、重力場防壁の出力を上回る飽和攻撃かつ装甲を貫く必要があるが。

前の世界では其れこそ怪力光線や反物質砲、波動砲に重力砲にレーザガン、1000cm砲等手段には事欠かないがこの世界の基準はあくまで通常兵器の範疇を超えない。

それこそ核砲弾による飽和攻撃しか手はない、いやある

突如としてヴォルケンクラッツァーの直上で大爆発が起きた。

超過負荷により重力場防壁が解け、着弾の衝撃にさしものヴォルケンクラッツァーもたたらを踏みなんとか持ち堪えたが、彼女に与えた衝撃は計り知れないものがある。

「なんだ今のは こんな威力の砲弾など聞いたことが無いぞ！」

ヴォルケンクラッツァーが知らないのも無理はない、今彼女を襲ったものの正体それは…

『80cm列車砲 グスタフ、ドーラ』

史上最大の巨砲、80cm砲から7・1トンもの徹甲弾を30kmもの彼方から撃ち出す正に怪物。

当たればヴォルケンクラッツァーとてただでは済まない。

「何処だ 一体どこから撃つたんだあ」

ヴォルケンクラッツァーは手当たり次第に撃ちまくり、辺りは砲撃の黒煙で夜の様な暗さになったが、更に二発の巨大砲弾が彼女の近く

に着弾し黒煙を吹き飛ばす。

身体を揺さぶり天地がひっくり返る程の衝撃を受け、忌々しげにヴォルケンクラッツァーは乱れた髪を振り払う。

周囲には小島一つ無い太平洋のど真ん中、そんな場所の一体どこにこの巨砲があるのか？

深海棲艦はこの空前絶後の巨砲を欧州から持ち込み、30を超える深海棲艦が取り付き海上砲台として2隻が就航していた。

見た目はまんま旭日の艦隊のフェルゼンだが、その馬鹿げた威力は見ての通りである。

さしずめ巨大海上砲台棲艦、着弾観測射撃により高精度で撃ち出される巨大砲弾は確実にヴォルケンクラッツァーを捉え被害を与えていく

重力場防壁を失い次々と被弾するヴォルケンクラッツァーは艦装のパルスレーザーやVLSを潰され、光子榴弾砲は既に弾を撃ち尽くし、所々から黒煙が立ち上がる。

魚雷が命中し速度が落ちたヴォルケンクラッツァーに、弱った獲物に群がるピラニアの様に駆逐艦イ級が雷撃や砲撃を叩き込みいよいよにされていた。

「ガァァァァァァ！そこを退けええええええ」

残った砲が駆逐艦を吹き飛ばし、包囲網を突破した先には更に別の包囲網が敷かれ二重三重に重厚長大な包囲網が網のようにヴォルケンクラッツァーを絡め取り、動きを封じる。

動きを封じた所に列車砲から砲弾が降り注ぎ既に20発を超える命中弾を浴びたヴォルケンクラッツァーは遂に片膝をついた？

「この私が、この私がこんな雑魚共に、認めん認めんぞ」

ヴォルケンクラッツァーは額から血を滴らせながら、最後の切り札を見せた。

「私の前から消えてなくなれえ」

艦装に格納されていた巨大な砲身を取り出しエネルギーを充填していく。

ヴォルケンクラッツァー最強の兵器波動砲が唸りをあげ、砲口に光が集中する。

エネルギーが飽和を迎え今まさに撃ち出され様としたその時、神の悪戯か偶々撃ち出された砲弾が波動砲の砲口に入り込み真っ直ぐ砲身内を通過した砲弾はエネルギーが飽和限界を迎えた薬室内に飛び込み瞬間、

太陽が太平洋に出現した。

直径50kmの灼熱の光が荒れ狂いヴォルケンクラッツァーを深海棲艦を海上砲台をありとあらゆる生命を巻き込み焼滅させた。

## 第4話

太平洋の辺境にある某鎮守府、その沖合いで所属不明の艦娘を発見したとの報告を秘書艦である高雄から受けた提督は早速救助された艦娘に合ったため、工廠へ向かった。

「いや、しかしこんな辺境ではぐれ艦娘と出会うとはいささか信じられないね」

この鎮守府の提督である、御布少佐は二十代半ばのまだ若い男性である。

ここに来る前は海軍の兵站と輸送網にシーレーン関係で功績を挙げたがある事件で上司の反感を買い上層部にへきへきしていた本人に余りやる気が無いのか、少佐の階級でありながら、辺境の鎮守府に左遷されても気にする事なく仕事をし暇な時は釣りを楽しんだりするようないこともあった。

「ここ最近、はぐれ艦娘が発生するような大規模な海戦や行方不明はでていませんから、確かに妙ではありませんね」

重巡型の艦娘である秘書艦の高雄は自身の記憶と手元の資料に目を通しながら提督に同意を示した。

最新鋭の重巡として生まれた高雄型の一番艦高雄だが、どうしてこんな辺境にいるかという点、以前所属していた鎮守府で同じ様に秘書艦として任務に着きその提督に無理やり“夜戦”を挑まれ敢え無く返り討ちにした結果、上層部の不興をかい、ここに送られた経緯がある。

二人とも同じくらい上層部にウケが悪くそれを歯牙にも掛けない姿勢に共感し二人の仲は良好であった。

「だとしたら一ヶ月前に起きた謎の爆発でも影響しているのか？あれで大分潮の流れが変わって苦労した」

御布提督の言う爆発とは太平洋中心部で起きた爆発の事であり、調査に派遣された艦娘が大量に浮遊している深海棲艦の残骸を調べた結果かなりの規模の海戦が起きたこと以外依然として原因不明の事件の事である。

この鎮守府にも情報だけは伝わっていたので、その事を知っていたが為それが原因不明と考えたのだ。

「撃沈した深海棲艦から艦娘が時たま自然発生することもありますし、長い間放浪して辿り着いたのかもしれないね」

「だとしたらそいつはとんでもなく運がいいな、案外雪風や時雨だったりしてするかもしれん」

そう言うのが早いか、御布提督は若干歩くスピードを速め高雄もそれに続いた。

「やっと来たか、遅えぞ提督」

鎮守府工廠、そこで提督の到着を待つて居た軽巡の天竜は提督に対し開口一番にそう言った。

「あら、天竜ちゃんたら提督にそんな口きいたらダメじゃないまた

高雄に怒られるわよ」

クスクス嗤いながら天竜型軽巡二番艦である龍田は口ではそう言  
いながらも目は全く真剣ではなかった。

「全く、相変わらずだな天竜、龍田、待たせて他所に悪いが報告を聞き  
たい」

提督は二人が口で言う程怒ってないことを感じていた、この二人は  
一言一言相手に何か言わなければ気が済まない性格だと知っていた  
からだ。

だがこの口が災いして辺境に飛ばされたが、二人とも改めるどころ  
か口煩い連中から解放されたと思う始末、けっこうイイ性格をしてい  
る。

だが、それさえ目を瞑れば非常に優秀で面倒見も良く駆逐艦艦娘か  
らは慕われているらしい。

「じゃっ早速と言いたいが、実際に本人を見た方が早いな」

天竜、龍田が先頭その後提督と高雄が付いて行き四人は入渠ドッ  
クへ向かった。

「こいつがそつだ」

天竜が指差した先には一人の艦娘が修復液に首から下を漬け横た  
わっている。

身長は駆逐艦サイズ、長い黒髪に白い肌をしたお人形のような艦娘  
がそこにはいた。



「これがそうか、見たこともない艦娘だなこれは」

御布提督は振り返り秘書艦の高雄に知っているかと目で問い、高雄は首を横に振った。

高雄も知らない艦娘、しかも所属不明ときている。

「提督、こいつこんなナリしてるが調べてみたらクラスは戦艦。しかも相当強力な」

「戦艦、こいつがか、どう見たって見た目は駆逐艦、良くて軽巡にしか見えないが…」

「嘘じゃないわよ、私も天竜ちゃんと確認したし工廠の妖精さんがそう言ったんだもの」

そう言われたら本当なんだろうとしたら益々不思議だ、現在確認されている戦艦型艦娘は出尽くしており、同盟国のドイツ艦娘ビスマルクはそもそも容赦が違う。

既存の艦娘に全く該当しない艦娘、そんなものが今日の前にいた。

「…まあ暫く様子を見よう。全てはこいつがおきてからだ」